
永嶋正春先生を送る

齋藤 努

本館の研究部情報資料研究系教授である永嶋正春先生は、2013年3月をもって定年退職されることとなった。永嶋先生が、宮内庁正倉院事務所保存科学調査室より、国立歴史民俗博物館情報資料研究部へ助手として着任されたのは、開館直前にあたる1983年1月のことであった。以来30年近くにわたって、日本各地の行政機関や研究機関と共同し、「漆の歴史的・文化史的研究」と「歴史資料の非破壊分析」を研究の中心に据えつつ、展示や共同研究など本館の事業にご尽力してこられた。

永嶋先生は1948年に埼玉県でお生まれになった。東京理科大学理学部化学科のご在学中からすでに、東京国立文化財研究所保存科学部の江本義理氏のもとで、文化財用の仕様として日本で新たに開発された開放型蛍光X線分析装置による三角縁神獣鏡の分析や、建造物修理への新しい合成樹脂の試行、男体山頂祭祀遺跡出土金属器（重要文化財）の保存処理などを手がけられた。この時期は、日本において文化財の新しい調査法や処理法が次々と開発されていった黎明期でもある。

1971年に東京理科大学をご卒業した後は、東京藝術大学大学院の保存科学研究室に入学された。当時の陣容は、教授として小口八郎氏、講師として杉下龍一郎氏、そして助手として新山榮氏をご指導にあたっておられた。永嶋先生はその3期生であり、同級生には三浦定俊氏、また1期生には澤田正昭氏がいらした。

先生の研究テーマの一つである「漆の歴史的・文化史的研究」へのご興味は、この大学院時代からすでに芽生えていた。それまで漆は美術や工芸の立場からしか扱われておらず、歴史的な視点からの研究は皆無といってよかった。これに対して先生は、漆を歴史資料としてとらえ、その素材や技法を自然科学的に調べることで、当時の文化のあり方や技術の到達度などを知ることができるのではないかと考え、日本で初めて漆の薄片化と顕微鏡による観察を試み、奈良時代の乾漆像に適用した。

大学院で保存科学と歴史資料分析の基礎を身につけられた永嶋先生は、1974年に、ちょうど保存科学担当者を求めている総理府宮内庁正倉院事務所に採用となる。現在の正倉院事務所には多くの分析装置などが備えられているが、当時は自然科学系の設備がなく、実験室を整えるのにかなりご苦労されたそうである。最初に手がけたのは金属資料の曝露試験による空気環境の調査であり、高額な機器類を使う分析には神戸大学の工学部にご協力いただいてモニターを続けていった。

その後さまざまな研究を積み重ねていくうち、次第にその実績が評価され、1982年から翌年にかけて、ついにX線回折装置と蛍光X線分析装置という大型機器類が正倉院事務所へ導入されることになった。いずれも文化財専用設計されており、分析試料を採取することなく、歴史資料本体から直接データを取ることができる特別仕様の装置である。特に、X線回折装置に対してそのような改造が施されたのは日本で初めてであった。しかし永嶋先生は、X線回折装置が設置され、ようやく基礎データが取れるようになった時に正倉院事務所を去ることになる。それは、温湿度や展示環境の研究を行うために、開館を間近に控えた国立歴史民俗博物館へ転任することになったからである。

永嶋先生は、1983年1月に本館へ着任され、同3月には開館事業に携わった。現在では第2調査室にも第3調査室にも多くの機器類や調査対象となる資料が置かれているが、着任当初は室内に

何もなく、がらんどうの状態だったそうである。先生は正倉院事務所での経験から、歴史資料の非破壊分析の必要性を強く感じており、早急にX線を使った装置を導入すべきだと考えた。そして着任後ただちに、大型試料室や移動式ヘッドを取り付けた蛍光X線分析装置、透過X線撮影装置、X線回折分析装置の3台を設置した。いずれも、現在の文化財科学の分野で多用され、主流となっている機器類である。

こうした設備やそれまでの蓄積の上に立ち、本館で永嶋先生のご研究は大きく花開いていく。

まず、研究の大きな柱の一つである「漆の歴史的・文化史的研究」については、まさに、先生が常々おっしゃっておられる「漆から歴史を語る」という言葉を体現するものであった。古代の乾漆像から始まった漆研究は、藍胎漆器など、縄文・弥生時代の漆に対する総合的な考察へと広がり、1994年の企画展示「漆文化—縄文・弥生時代—」などへと結実していく。これは、先生が新たに開発した漆の薄片製作技法という、高い熟練を要する前処理法によって初めて可能となったものである。しかし、より重要なのはその前処理法自体ではなく、分析試料採取箇所を選定、薄片化、断面観察の一連の流れに加え、観察所見から歴史的・文化史的考察を得るという文化財科学の研究手法が確立されている点にある。先生が大学院でご研究を始められた1970年代から、歴史学や考古学と自然科学との学際研究はさまざまな形で進められるようになったが、その連携がうまく機能した例はそれほど多くない。その点で、先生の研究姿勢とその業績は突出したものであり、また時代を先取りしたものといつてよいだろう。

もう一つの研究の柱である「歴史資料の非破壊分析」については、全国の自治体における文化財保護主管部局、埋蔵文化財調査研究機関、博物館・資料館などとの緊密な協力関係を抜きにしては語れない。永嶋先生はこれらの機関から常に膨大な数の資料調査や分析の依頼を受け、その成果を報告書や紀要の形で公表している。さらに特筆すべきことは、単に報告書などを相手方へ提出するだけでなく、文化財の保管・管理から保存・活用にいたるまでの総合的な処置方法を提示し、また助言していることであり、これらによって調査現場の担当者から厚い信頼を得ているのである。

では、永嶋先生がこのような姿勢を貫いている背景には何があるのだろうか。それは、先生が正倉院事務所という西日本の機関に勤務した経験があることと、大学院時代から先生の身近に三浦定俊氏（元東京文化財研究所）や澤田正昭氏（元奈良文化財研究所）がいらしたことが大きく影響している。先生は、「研究に主眼をおきながら歴史資料を非破壊分析する拠点機関が、それまで東日本にはなかった。全国の自治体が求めている要望にできるだけ応えるためにも、窓口は常に広く開けておきたい」とおっしゃっている。本館が自前の資料で調査できる範囲には限りがある。しかし、全国にあるさまざまな機関の所蔵資料を本館の設備で調べることによって、それらが内蔵する情報を高度化し、また総合化することは可能であろう。そうした考え方に基づいて行われた研究の一例が、自然科学で得られた情報を歴史学的な考察へと結びつけていった1993年の論文「『王賜』銘鉄剣のX線調査と銘文の表出」である。ここでも、先生の文化財科学的な姿勢が強く打ち出されており、古墳時代の鉄剣の形態や性状、象嵌文字の発見、銘文の解釈にいたるまでの学際的な研究が、自然科学と人文科学の両方の側面から行われている。1999年の論文「非破壊手法による銅印の科学的調査」も同様で、歴史学や考古学の立場から積み上げられてきた数多くの銅印の年代観や時代的変遷の成果を基盤に、自然科学分析によってそれらをグループ分けし直し、後世の模倣資料との識別も行うという別の視点からの考察が展開されている。

永嶋先生が身につけておられる高い技術と識見に対し、今後も新たな活躍の場があることをご期待申し上げたい。われわれも、これまで先生が先頭に立って切り開いてこられた学際研究の道を、さらに押し進めていきたいと思う。